

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Gray Scale

C

Y

M

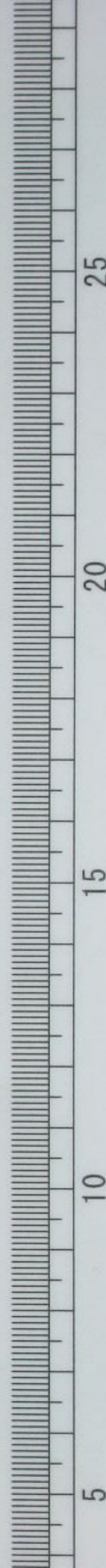
Kodak
LICENSED PRODUCT



和漢駢事

乾

又 1
1992
1



5

10

15

20

25

門 1992
1-2

鑄新午甲保元

虞淵方外史著

和漢駢事

撫松園藏



和漢駢事序



春秋之傳三家相角太史
之撰言有矛盾後之續獨
紀世者未免有向背駁純
而乖於非議辨晰固其宜

口莫并事

無公園藏

也。然則四十餘年之事蹟，
多可處措新置也。專本
循理則流于非理之刻峭，
湯鋤法辭則造于點煩之
陋笨。况又鼎革之屢變，人

事之不齊，操會萬別，不出
一揆。愛憎擊為，頗正生焉。
要之，在乎根蒂。人情百洞，
鑑時運之所自，驅使精神，
以貫穿于古，牢籠人物，歟。

權衡一正、同異不兩立、真偽
自顯、實函古作者之欺、固乎
某湖中英公餘事、長史學
一古今符和漢鏡、映以微毫、
雖乃稗官野碑、有可戒之

端亮、至於無間疑、而止焉、其
立素、魯異乎、余所曾編、數
而輒提于人之意、表新、秦
數例、以祝一志、懺衆、隊遠、迤
危、照自、喪、而一閱、提和、切、漢

生益博涉也。蓋於作者不
 虞之為畔。夫然不能我舍
 吾學。而阿英公。亦應不為
 擲。其眉以左。祖於我。姑界
 鴻溝。以支一時云。

皇天保歲。次癸巳五月

宣德郎藤公岳撰并書



和漢駢事序

玉匣二箇能物乎山多都乃對邊
 舉鹽船乃并倍言不事者久方乃
 天登地止天傳日登月止遠最初
 止為氏萬物乃上余八百日往久
 濱真砂止數邊無久多有中余佐
 比都流也韓乃識者乃書計留蒙

求止所謂書波其國人乃事業乎
 鴛鴦乃雌雄奈須番比舉互空蟬
 乃世尔專持扱不書登奈母聞在
 然乎超然法師乃此今被著都流
 書以青海原成須真廣久船乃舳
 乃不至隈無久被讀涉之書乃學
 力乃筆乃進毘爾師木島乃日本

毛事佐敞久漢毛不二行人乃趣
 乎對邊舉氏被書計禮婆十寸見
 鏡止見以天行尔磨志々心乃程
 佐敞被知且波彼識者乃物為都
 流爾母真似通比天專不後於牟
 加之久愛久亦是乎毛彼止對邊
 雙邊氏中今乃世毛後世毛白玉

乃緒絶在勢受將持囉物止古曾
所思禮

天保四年九月十五日 城戸千楯

凡例五則

一茲編私創ニ非ス先儒山本洞雲兩鏡録ノ刻アリ安積澹泊湖亭涉筆ノ中亦數條ヲ載ス恨クハ菟羅廣カラスレテ卷ヲ畢ヤスレ是以梵誦ノ暇子史ヲ涉獵スルコトニ其相類セルモノヲ摘ム古人ノ所録ヲ併テ若干條アリ而シテ自惟ラク如此ノ瑣事何ソ心ヲ費ニ足ント棄テ篋中ニ置コト年アリ客歲中秋褥ニ就ク延テ臘尾ニ至テ僅ニ起色アリ病幃索莫間ヲ消スルニ方ナレ因テ舊癖復生シ枕上毫ヲ弄シ

テ事ニ此ニ從フ日ニ二三事或ハ五六事ヲ録
シテ俄頃ニ帙ヲ成ス但淺短ノ材其駢列スル
トコロ切實ナラサラニコトヲ恐ル冀ハ同好
ノ諸友其箴砭ヲ賜ヘ

一傳竒小説水滸西游ノ如キハ論ナシ今古説部
ノ中竹書紀年穆天子傳等ノ如キ尚實録ニ非
ス漢土文獻ニ富カユヘニ贋造偽作亦世々ニ
乏カラス彼邦已爾リ況ヤ皇國古今ノ典籍
彼ニ因循スルコト多キ時ハ其翻案スルモノ
十二ニシテ常ニ六七ナリコレヲ淘汰シテ以テ

駢列スルコト實ニ容易ナラス今心ヲ用テ採
擇ストイヘトモ恐クハ續貂ノ譏アラシ

一皇國海外域ヲ異ニストイヘトモ其事情殊異
セサルヲ以テ古今ニ亘テ類同スルコトアル
モノ亦一二ニアラス或ハ彼先テ此後ル、モ
ノアリ或ハ此先テ彼後ル、モノアリ今採ル
トコロ盡ク吻合セストイヘトモ或ハ事ノ同
キアリ或ハ意ノ似タルアリ其他覽者意ニ逆
ヘテ味テ可ナリ而シテ大津皇子絶命ノ詩明
人孫蕢臨刑ノ作ニ符合セル如キ其尤ナルモ

ノナリ故ニ安子先評云朱鳥元年皇子賜死與
唐中宗嗣聖三年相值據獻徵錄黃死在洪武二
十年相距七百餘年明人未必見懷風藻縱見之
未必踏襲事之偶合乃有如此者筆涉豈境異人異
時亦異ニシテ情性ノ靈相通セルニアラスヤ
一漢土ノ事ノ如キ理本書ノマヽニ舉ヘケレト
毛童蒙ニ便セシ爲ニ且夕譯列ス 皇國ノ事
實其載ルトコロ雅俗アリ雅中亦今古ノ文體
アリオノく本書ニ從カユヘニ其不同アリ
唯一時ノ譚柄ニ供スルノミ覽者其猥雜ヲ

咎ルコトナカレ

一原稿列次ナシタヽ記憶スルトコロヲ以テ其
所讀ノ書ニ照シテ割記スレハナリ今淨書ニ
臨テ十門ヲ分ツ勿卒ニ類聚スルトコロ亦鹿
鹵甚シカラシ又稿本録スルトコロ此ニ止ラ
ス且一百則ヲ以テ初輯トス尚陸續シテ其遺
ヲ撫フヘシ

天保甲子春日

虞淵方外史識

和漢駢事

目錄

- | | |
|-----|----------|
| 德行一 | 孝友仁惠清廉之類 |
| 氣節二 | 忠烈貞湫剛毅之類 |
| 器識三 | 偉度先見操守之類 |
| 經務四 | 政績計畫治生之類 |
| 文雅五 | 學殖詞藻情性之類 |
| 兵機六 | 籌略武案勇敢之類 |
| 巧藝七 | 書畫工匠殊能之類 |
| 靈竒八 | 異迹徵應神恠之類 |

和漢駢事卷上
三
排排園齋

智數九 敏悟應卒權奇之類
襍類十

和漢駢事卷上

淡海 虞淵方外史 編

德行一 孝友仁惠 清蕪之類

高倉帝 唐太宗

葵ノ前ハ建禮門院宮女ノ婢ナリ高倉帝ニ咫尺
シテ恩幸ヲ受ク官女コレヲ覺テ敬スルコト夫
人ノ如シ宮中私ニ語テ葵ノ女御トイフ帝コレ
ヲ聞シ召テ大ニ愧テマ夕召サスコレヨリシテ
帝ノ心快々トシテ樂マス關白基房奏シテ云凡

口漢并事卷上
一
無公園齋

天子ハ一后三夫人九嬪二十七ノ世婦八十一ノ御妻ハ即六宮ノ常制ナリ夫禮ニ天子ハ十二諸侯ハ九卿太夫ハ三士ハ二ナリ士猶二人アリ況ヤ天子ヲヤ且色ヲ以テ擧ラル古今其例多シ彼女氏姓ヲトスルニ及ス基房養テ後宮ニ納ルヘシト帝曰ク否龍潛或ハ脱屣ノ日ハ例アラシク已ニ帝位ニ升テ頌國ニ淫ス恐クハ殷紂北鄙ノ舞玄宗鼓鼙ノ聲アラシト終ニ許シタマハス唐ノ鄭仁基ノ女容色絶レテ姝シ太宗聘シテ充華ノ女官トセントス魏徵其己ニ陸氏ニ許嫁スト

聞テ遽ニ進テ諫ム太宗驚テ浚ク克責シテ策使ヲ停ム房玄齡等カ云女陸氏ニ適ク顯然ノ狀ナシ大禮既ニ行ル中止ヘカラスト太宗遂ニシタカハス貞觀政要

橘良基

劉玄明

良基五州ニ歷任ス罷歸コトニ資財ヲ載セス毎ニ子孫ニ教テ身ヲ潔スルコトヲ勸ム其子在公治政ノ要ヲ問フ良基云百術アリトイヘトモ一清ニシカスト

劉玄明甚タ吏能アリ建康山陰ノ令ヲ經テ政ツ

子ニ天下第一ナリ後傳翹代テ山陰ヲ治ム玄明
 ニ問テ云願クハ新令尹ニ語ルニ舊政ヲ以テセ
 ヲ玄明答テイフ我ニ奇術アリ卿カ家譜ニ載セ
 サルトコロナリ縣令トナルニ惟日ニ一升ノ飯
 ヲ食シテ酒ヲ飲マス此第一策ナリト世説
 自警編云杜正獻公嘗謂門生云作官第一清畏
 無求人知苟欲人知同列不謹者衆必譖之為上
 者又不如加明察適足取禍耳但優游於其間默而
 行之無愧於心可也

相應和尚

熊執易

山門ノ相應ハ慈覺ノ徒ナリ少年ノ時隣房ノ沙
 彌ノ度ヲ求テ悲泣スルヲ聞テ已カ得ヘキ度牒
 ヲユツル翌年藤公相度者ヲ求ム師ノ云コレ汝
 カ良縁ノ相應ナリ今汝ニ名クルニ相應ヲ以テ
 セントテ上名シテ得度セシム
 唐ノ熊執易キキ舉ニ赴ク行テ潼關ニ次ル秋霖ニ遇
 テ一月餘逆旅ニ滯ル隣店ニ一士アリ吁嗟スル
 コト數次ナリ執易密ニコレヲトヘハ前堯山ノ
 令樊澤トイフモノニテ制舉ニ値テコヽニイタ
 ルニ馬斃レ囊空クシテ進ムコトアタハサルナ

リト執易遽ニ所乗ノ馬ヲ與ヘ囊ヲ倒ニシテコレヲ濟フ執易其年罷テ澤ヲ攀ケ明年登科セシトソ言撫

永觀律師

趙孝

律師東大寺ノ別當ニ補シ拜堂ノ爲ニ南都ニ下向セラレシニ藁沓ヲハキ歩行シ小法師二人ヲ具シ一人ニ皮籠ヲ負セラル木津河ノ邊ニテ南都ノ方ヨリ人走り向テ京ヨリ被下侯人ナルヤ今日別當ノ御坊拜堂ノ爲ニ御下向アルヘシ如何キカシメ給フヤ只今何程被下給フラント問

ケルニ律師コノ乞食山人コソソレヨト示サレ

ケレハ使走歸テ此由ヲ云ケリトソ

漢ノ趙孝父田禾將軍ナルヲ以テ任シテ郎トナル

告歸ルコトニツ子ニ白衣ニテ歩擔ス嘗テ長

安ヨリ還リ郵亭ニ止ントス亭長時ニ先テ孝カ

過ヘキヲ聞テ洒掃シテ待ツ孝既ニ至テ名ヲイ

ハス長内ルコトヲ肯ス因テ問フ田禾將軍ノ子

長安ヨリ來ル何ノ時ニ至ンヤト孝ノイフ尋テ

至ントコ、ニ於テ遂ニ去ル世説

山田古嗣

王褒

古嗣ハ越後介益人ノ長子ナリ幼歳母ヲ喪テ從
母ニ事フ天性篤孝ナリ嘗テ書傳ヲ讀ミ樹欲靜
而風不止子欲養而親不在トイフニ至テ涕淚ニ
夕ヘス卷帙コレカ爲ニ沾濡セリ

魏ノ王哀父儀非命ニ死セシラ痛テ微辟ニアヘ
トモ皆就カス詩ヲ讀テ哀々父母生我勉勞トイ
フニ至テツ子ニ三復シテ流涕セサルコトナシ
門人學ヲ受ルモノ並ニ蓼莪ノ篇ヲ廢セリ魏志

明慧上人

圭峯禪師

明慧城州梅尾ニ住セリ承久ノ亂ニ逃士山ニ匿

鎌倉ノ將士搜捕シテ慧ニ及ントス泰時素其德
望ヲ聞ケルカユヘニ庭ニ下テ拜ス慧自若トシ
テイヘラク山中ニ僻處シテ學フトコロスラ尚
怠失ス況ヤ世間ニ於テ何事ニカ關ンサレト吾
山殺生ヲ禁スレハ飛鳥走獸モ亦ツ子ニ來テ害
ヲ逃ルサラハ逃士ノ結界ニ匿ルモアルヘシ佛
ノ制苦ニアヘハ即救フ豈情ナク驅除セニヤ若
政事ニ害アラハ老僧カ頭ヲ刎ラレヨト泰時涕
ヲ垂テ罪ヲ謝シ兼テ法要ヲトハレトソ
甘露ノ變ニ李訓終南山ニ走リ宗密圭峯ニ依ル密

コレヲ匿ントス其徒不可ナリトス訓乃鳳翔ニ
走テ執ヘラレタリ訓死シテ後仇士良密ヲ捕テ
殺ントス密怡然トシテ曰浮屠ノ法困ニアヘハ
救フ死固リ其分ナリト士良又コレヲ釋ス唐書
傳

伊藤長胤

阮長之

東涯夜フケテ家ニ回ル途中誤テ人家ノ軒ニア
リシ防虞貯水ニ溺ス五六町過テ其貯水タルコ
トヲ覺タチカヘリテ其戸ヲ叩キ再三コレヲ謝
シ翌日人ヲ遣シテ更ニ洗滌セシム

阮長之中書郎トナル夜隣省ニ往シニ履ヲ誤著
シテ閣ヲ出ツ長之事ニ依テ自刎ス門下闇夜人
シラスト云ヲ以テ列狀ヲ受ス長之固クコレヲ
遣シテ云長之一生不侮闇室

片山徽猷

朱百年

北海少年ノ時落魄困苦シテ親ニ事ヘテ至孝ナ
リ老後妻孥ヲ用ニコトヲ勸ム北海ノ云我昔
親ヲ養フ時輕煖ナラシムルコトアタハス今何
ソコレヲ用ニヤトテシハク落涙シケルトソ
朱百年家貧シ每冬月ヲ以テ亾フ衣ニ絮ナシ百

年コレヨリシテ綿帛ヲ衣ス嘗テ寒時孔思遠ノ
 宅ニ宿ス衣悉袂布ナリ酒ヲ飲テ醉眠ス思遠臥
 俱ヲ以テ覆フ百年初コレヲシラス既ニ覺テ引
 去思遠ニ謂フ綿定テ奇温ナラントテ涕ヲ流シ
 悲慟ス思遠亦爲ニ感泣セリ世説

氣節二 忠烈貞汎
 剛毅之類

楠廷尉

張睢陽

湊川ノ役ニ正成舍弟正季ニ向テ柳最後ノ一念
 ニ依テ善惡ノ生ヲ引トイヘリ九界ノ間何レカ

御邊ノ願ナルト問ケレハ正季カラクト打笑テ
 七生マテ只同シ人間ニ生レテ朝敵ヲ亡サハヤ
 ト存候ト申ケレハ正成世ニ嬉ケナル氣色ニテ
 罪業フカキ惡念ナレトモ我モ个様ニ思ナリイ
 サ、ラハ同ク生ヲ替テ此本懐ヲ達セント契テ
 兄弟差違テ同シ枕ニ臥ケリ橋本八郎正員宇佐
 美河内守正安神宮寺太郎兵衛正師和田五郎正
 隆ヲ初トシテ一族十六人相從フ兵五十餘人思
 々ニ並居テ一度ニ腹ヲソ切タリケル
 賊將尹子奇睢陽ヲ陷ル張巡西ニ向ヒ再拜シテ

イハク臣力竭タリ生テ以テ陛下ニ報スルコト
アタハス死シテマサニ厲鬼トナリテ賊ヲ殺ス
ヘシト城遂ニ陷ル巡許遠ト、モニ執ヘラレ南
霽雲雷萬春等三十六人皆殺サル唐書本傳

勾當内侍

魏國夫人

後醍醐帝勾當ノ内侍ヲ義貞ニ賜フ後義貞ノ戰
死ヲ聞テ髮ヲ薙キ尼トナリ嗟峨ノ往生院ニ住
シ節ヲ全シテ終レリ

唐ノ昭宗宮人陳氏魏國夫人ヲ李克用ニ賜フ後克用
薨シテ陳氏尼トナリ晋ノ天福中ニ至テ卒ス通鑑

齊藤實盛

史天澤

篠原ノ敗ニ齊藤別當實盛鬢髻ヲ墨ニ染テ討死
セシコト源平盛衰記ニ委シ

史忠武天澤鬢髻已ニ白シ一朝忽盡ク黒シ世祖見
テ驚テコレヲ問フ對テ云臣藥ヲ以テコレヲ染
ム上ノ云コレヲ染テ何ニカスル謂臣鏡ヲ覽テ
髭鬚ノ白ヲ見ル竊ニ年ニサニ暮ントス忠ヲ陛
下ニ盡スノ日短キヲ傷ム因テコレヲ染テ黒ラ
シメ報效ノ心曠昔ニ異ラサラシムト輟耕錄
隨園詩話云諱老染鬚似非高人所爲南朝陸展

有媚側室之譏然司空圖唐季忠臣其詩曰鬢鬚
強染三分祈絃管聽來一半愁可知染鬚亦無傷
于雅士

上總忠光

豫讓

上總五郎兵衛尉忠光ハ平氏ノ士ナリ後鳥羽院建
久三年永福寺ノ新堂ヲ經營スル時賴朝コレヲ
檢覽セラル忠光魚鱗ヲ以テ左ノ眼ヲ蔽ヒ偽テ
眇ノ如クニシ劍ヲ懷キ縣役ノ間ニ紛居テ賴朝
ヲ狙フ事アラハレテ誅セラル
晉ノ豫讓身ニ漆シテ厲トナリ炭ヲ吞テ啞トナ

リ趙襄子ヲ狙フ後其衣ヲ請テコレヲ擊チ劍ニ
伏シテ死ス史記

楠正行

王駿

正行住吉ニ詣ス路次ニテ北兵辨ノ内侍ヲ掠去
ニ逢テ奪還セリ帝内侍ヲ以テ賜ントス正行和
詠ヲ詠シテ志ヲ叙ヘ固ク辭レ申ケリ

トテモ世ニナカラフヘクモアラヌ身ノ假ノ契ヲイカテ結ン
唐ノ玄宗宮人ヲ以テ王駿ニ賜フ駿云臣ノ君ニ
事ル猶シ子ノ父ニ事フルカコトシ詎ソツ子ニ
闡掖ニ近テコノ賜ニ當ルコトヲセント死ヲ誓

テ以テ免ル唐書本傳

小山田高家

王超

兵庫ノ敗ニ義貞ノ馬龍箭ノ爲ニ殪レ求如冢ニ
登テ飛矢ヲ避ク小山田太郎高家已カ馬ヲ義貞ニ
授テ退シメ敵ヲ禦テ討死セリ
遼騎六萬定州ヲ攻ム宋ノ太祖田欽祚ニ命シテ
兵三千ヲ領シ征セシメ蒲城ニ戰フ馬流矢ニ中
テ斃ル騎士王超馬ヲ以テ欽祚ニ授ケテ免ル、
コトヲ得夕リ契丹國志

縣守

趙真人

仁德帝ノ時吉備國ノ人縣守勇悍多力ニシテ輕
捷ナルコト絶倫ナリ時ニ備中國川嶋河ニ虜ア
リ行旅ソノ害ヲ被ル縣守コレヲ患ヒ臂ヲ攘テ
水ニ入り劍ヲ拔テ虜ヲ斬リ悉ク種類ヲ絶ツ河
水コレカ爲ニ赤シ時人ソノ勇ニ服シ其所ヲ號
シテ縣守カ淵トイフ
趙真人名ハ昱仙教ヲ得青城山ニ隱ル陪ノ文帝
詔シテコレヲ聘シ蜀郡ノ太守トス郡ニ冷源ノ
大河アリ河ニ毒蛟ヲ藏ス蛟動クトキハ河決シ
テ人ヲ傷ル端陽ノ日真人兵ニ命シ河上ニ鼓ヲ

形名妻 李侃婦

欽明ノ朝上野君形名將軍トナリ蝦夷ヲ討テ却テ圍マル將軍迷テセンカタヲシラス且暮城ヲ踰テ逃ントス其妻夫ヲ責テイハク君ノ祖先萬里ニ跨リ滄海ヲ踰テ武勇ヲ子孫ニ傳フ今何ソ祖先ヲ屈レ後世ニ嗤レ給ニヤトテ酒ヲ酌テ強テ夫ニ飲レメ其醉テ臥タルヲ伺ヒ親ク夫ノ劔ヲ佩ヒ弓ヲ張り侍女ニ命シ弦ヲ鳴サシム既ニシテ夫ヲ起シ甲冑ヲ進ム夷軍衆猶多シト思テ引退ク於此散卒ヲ集メ追テコレヲ敗レリ

建中ノ末李希烈汴州ヲ陷レ陳ヲ襲ニコトヲ謀ル項城ノ令李侃逃去ントス婦楊氏ノ云冠至ハニサニ守ヘシ力足ラスハ死セン若重賞ヲ以テ死士ヲ募ラハ守ヘシト侃吏民ヲ召シ激シテ數百人ヲ得率テ城ニ乗ス婦自ラ炊爨シ以テ衆ヲ享スタマク侃流矢ニ中テ走還ル婦怒テ云君アラスニハ人誰カ守ント侃乃チ城ニ登ル賊引去テ縣卒ニ完キコトヲ得タリ

烈女有智

細川氏ノ夫人ハ明智光秀ノ女ナリ太閤伏見

ニ在テ諸將ノ北ノ方ヲ呼入レ饗應セラレシコ
トアリシニ女ノ人ナクテ一室ノ中ニ入テ他人
ニ見ユル事ヤハアル我モ召レントナラハトテ
懷ニ匕首ヲ用意セラレケレハコレヨリ秀吉ノ
不法止ニケリ

唐ノ滕王極テ淫ニシテ諸官ノ美妻白ヲ得ルモ
ノナシ詐テ妃喚ト言テ即無禮ヲ行フ時典籤崔
簡ノ妻鄭氏初テ至ル王喚シム去サラント欲レ
ハ王ノ威ヲ恐ル去ケハ則王ノ辱ヲ被ル鄭云害
ナシト遂ニ王ノ中門ノ小閣ニ入ル王其中ニ在

テコレニ逼ラントス鄭大ニ叫テ云大王豈如此
ノ事ヲナサン必家奴ナラント隻履ヲ取テ王ノ
頭ヲ撃テ血ヲ流ス妃聞テ出ツ鄭氏還ルコトヲ
得タリ王慙テ旬日事ヲ視ス囊

器識三 偉度先見 操守之類

藤原行成

狄青

實方ノ中將禁中ニアリテ或時行成ヲ怒ルコト
アリ其冠ヲ打落シテ庭ニ擲ツ行成顔色ヲモ變
セス徐ニ人ヲ呼テ冠ヲ取シメ頭ニ戴キ袖カキ

合セテ實方ニ向ヒイカナル咎アリテカ亂寇ニ
 アヒ侍ヤラント申サレケレハ實方言ナクテ逃
 ラレケリ帝コレヲ物陰ヨリ見給ヒ行成ノ性度
 ヲ重シ官ヲ進メ實方ニハ歌枕ミヨトテ奥州ニ
 遣レントナシ
 韓忠獻珣云狄青定副帥トナル一日公ヲ宴スル
 ニ劉易先生與レリ易性疎訥ナリ時ニ優人儒ヲ
 以テ戲トス易勃然トシテ謂フ黥卒敢テ如此ト
 テ武襄青ヲ罵テ口ヲ絶ス樽俎ヲ擲テ起ツニ至
 ル公此時武襄ヲ見ルニ氣殊ニ自若トシテ少モ

動ス笑語温然タリ次日首ニ劉易ニ詰テコレヲ
 謝ス公是時ニ於テ已ニ其量アルヲ知ルト
 忠獻

平貞盛

王衍

平ノ將門式部卿敦實親王ノ許へ參テ歸ル路ニ
 テ貞盛ノ來ルニアヘリ貞盛參テ親王ニ白ク御
 門前ニテ將門ニアフ一卒ヲ具セサルヲ以テ渠
 ヲ殺スコトヲ得ス深ク恨トスト親王其故ヲ問
 給フニ貞盛ノ云彼者他日カナラス大事ヲ起シ
 テ皇命ニ逆フヘシトテ首ヲ擡テカヘリ又果シ
 テ其後將門謀叛セリ

石勒年十四邑人ニ隨テ行テ洛陽ニ販スルトキ
上東門ニ倚テ嘯ク王衍見テコレヲ異トシ顧テ
左右ニ謂ヘラク向ノ胡雛吾其聲ヲ觀ルニ奇志
アルコトヲ知ル恐クハ天下ノ患ヲナサント馳
テコレヲ收シムルニ勒已ニ去書

源光

程顥

五條道祖神ノ祠ニ大ナル柳樹アリアルトキ佛
アリ此上ニ現シ光ヲ放テ寶華ヲ雨ス都人舉テ
來リ拜ス源相光聞テ必妖魅ノ所爲ナラント念
ヒ往テ樹下ニ到リ人ヲ避テ仰キ瞻ルニ時ヲ移

テ不瞬佛變シテ大ナル嶋トナリテ墜ツ人其明
ニ服セリ

程明道鄆縣ノ主簿トナル南山ノ僧舎ニ石佛

アリ首ヨリ光ヲ放ツトテ男女聚觀ル因テ僧ニ

語テイフ光現レハ白セ吾職事アリテ往クコト

アタハステサニ其首ヲ取テ觀ルヘント自是復

光アラス冬夜箋記

中院内府

向敏中

閑院右府實中院内府同日ニ相ニ拜セララル

黄門賀ニ赴ク先右府ニイタレハ内外馬車立ミ

子テ俄ニ四脚門ヲ營レタリ別門ヨリ入テ邸中
ノアリサニ見ルニ男女皆盛服シテ埽除ヲナ
シ饗膳ヲ設テ賓客ヲ待ツ良久クシテ主人出テ
喃々トシテ恩ヲ謝シ笑語時ヲ移ス次ニ内府ニ
詣レハ門外閑寂トシテ人ナシ中門ニ入レハ狗
跡アリ人ヲ請テ言入ルニ主人謁者ニ隨テ出ツ
衣服トリツクアラウコトナシ只云宰相トナル固
大事多シ何ゾ賀センヤト其人大ニ靜譟ノ異ナ
ルヲ歎セリ
宋ノ向敏中右僕射ニ拜セラル真宗其必喜ニコ

トヲ想フ密ニ李武昌ヲシテ覘シム門外賀客寂
トシテ一人ナシ厨中亦酒席ヲ備ルコトナシ上
笑テ向敏中大ニ官職ニ耐タリト曰ヘリ文海披沙

太閤 馬殷

秀吉中國ヨリ馳登リ義軍ヲ率テ光秀ヲ誅シ信
長ノ仇ヲ報ス其後織田氏ノ諸將タ、分國ヲ爭
フノミ秀吉獨紫野ニ於テ右府ノ葬儀ヲ營ミ廣
ク佛事ヲナスソレヨリ漸ク人望一人ニ歸シテ
終ニ天下ヲ掌握セリ
楚ノ馬殷ハ上蔡ノ人ニテ自ラ伏波ノ後ナリト

和漢馬事考 卷之七 抄本圖補

イヘリ唐ノ未亂ニ乘シテ豪俠競起ル時殷方ニ
卒伍ニ處ス渠師何氏ニ隨テ南ニ長沙ヲ侵シテ
コレニ據ル殷戰テ頻ニ功アリ何擢テ、裨將ト
シ命シテ邵州ノ刺史トス何氏卒ス諸將外ニ在
モノ皆兵ヲ擁シ歸テ其位ヲ爭フ唯殷素服シテ
喪ヲ發ス識者コレヲ禮ヲ知レリトイフ未幾衆
軍オノク其帥ヲ殺シ殷ヲ迎テ主トセリ
三楚新錄

大關夕安

何棟

宇津宮ノ軍那須ヲ攻ケルヲ擊敗リ己ニ大將ヲ
モ討取ヘカリシヲ那須ノ長臣大關夕安兵ヲ班

テ追ス人皆今度宇都宮ヲ亡スヘキニトイフ夕
安聞テ味方ニサセル根本ノ固ナクテ宇都宮ヲ
攻破ラハ小田原ニハ那須ヲ敵トセン然ハイカ
ニシテ那須ヲ守固ムヘキ宇都宮ニ小田原ヲア
ヒシラハセ其間ニ那須根ヲ浚ク蒂ヲ固クシテ
小田原ヲモ敵ニシツヘシトイヘリ
嘉靖中仇鸞朶顏諸夷ヲ討センコトヲ請フ兵部
コレヲ議ス侍郎何棟イハク朶顏ハ犬羊ナリ縱
令反覆アリトモ患ヲナスコト尚小ナリ北虜ハ
虎狼ナリ若コレニ據シメハ禍極ナカラントス

口莫辨事卷七

廿七

無公圖藏

和漢馬車卷三十一
無松園藏

今朶顔ヲ剪除セハ北虜必ス據テ巢穴トセシコ
レ藩ヲ撤シテ寇ヲ延クナリト明史

森蘭丸
晏殊

森蘭丸ハ信長鍾愛ノ侍童ナリアルトキ信長ノ
刀ヲ持次ノ間ニ候セシニ閑暇ノアツリ鞘ノ目
ヲ幾度モカソヘタルヲ信長モノ、陰ヨリ見ラ
レタリ後時扈從アマ夕近侍セシ中ニテ此鞘ノ
目ノ數ヲ云アテタルモノニ刀ヲ賜ヘシト曰シ
ニ何レモサマニ其數ヲイフ蘭丸ヒトリモノ
イハス信長恠テ問レシニ某ハサキニ其數ヲシ

レリ故ニイハスト答シカハ深ク感シテヤカテ

其刀ヲ賜リシトソ

晏元獻殊童子ノ時張文節朝ニ薦召テ闕下ニ至

ル適進士ヲ試ルニ值公ヲ試ニ就シム公一試題

ヲ見テ云臣十日前已ニ此賦ヲ作レリ草尚アリ

乞別ニ題ヲ賜ヘト上極テ其不隱ヲ愛又自警編

北條氏康
潘濬

氏康ノ前ニテ嫡子氏政接伴シケルヲ氏康見テ

落涙シ申ケルハ北條モ我一代ニテ終ルトナリ

氏政初近習者興覺ケル偕氏康云今氏政ノ食ス

和漢新事上
十八九
無松園藏

ルヲ見ニ一飯ニ汁ヲ再瀝タリ凡人ハ高卑共一
日ニ再食スレハ銀鍊セサルナシ一飯ニ汁ヲ瀝
ル積モ覺ス家中心底ヲ積リ人ヲ察セニコト覺
東ナシ其明日ニモ死ナハ隣國攻ハテ氏政ヲ亡
コト疑ナシ北條ハ我一代ニテ終ト覺トソ
樊佃吳ニ叛ク吳主推潘濬ヲ召テ問フ濬五千ノ
兵ヲ請フ往カハ佃ヲ擒ニスルニ足ニ吳主云卿
何以輕之濬云佃嘗テ州人ノ爲ニ饌ヲ設日中ニ
至ルニ比テ得ス自十度起ツコレ侏儒一節ノ驗
ナリト推濬ヲ遣ス果シテ佃ヲ斬レリ
讀書

藤原秀卿 劉基

將門叛逆ヲ起セシ時秀卿初ソレニ黨セントテ
往タリシニ將門喜ニ堪スアハタ、シク出迎ヘ
對シテ食セシニヨリ飯ヲ噴チラレテ袴ヲ汚セ
リ秀卿其輕躁共ニ事ヲ謀ルニタラサルコトヲ
看破シ貞盛ヲ輔ケテ討シテコレヲ平ク
元季韓林兒始潁川ヨリ逃レテ武安ニ之キ穿窬
ヲナシ漸ク劫殺ヲ肆ニス徒アリステニ繁シ乃
亂ヲ倡テ小明王ト稱ス劉護軍基初コレニ就ク
謂ク豎子謀ルニタラスト去テ太祖ニ適ク因テ

號ヲ大明ト建シコトヲ請フ太祖コレニ從フ韓
ハタシテ先殄フ野記

經勢四 政績計畫
治生之類

昭宣公

霍光

陽成帝在位ノ日宴樂ヲ事トシ頑童ヲ近ケ耆老ヲ
疎シ醜聲外ニ聞フ昭宣公基朝ニ入テ嬖臣小野
清和等ヲ逐ヒ屢諫レトモ聽レス驕逸日ニ甚シ
公其諫ヘカラサルコトヲ知リ一日馬場殿ニ幸シ
テ競馬ヲ觀夕ニハシコトヲ奏ス帝大ニ喜テ行

幸ス公近衛ノ士ニ命シテ堅ク宮門ヲ守シメ鳳
輦ヲ二條陽成院ニ遷シ遂ニ仁明帝ノ第三子一
品式部卿ノ宮ヲ以テ天子トス光孝天皇是也
漢ノ昌邑王昭帝ノ喪ニ居シテ悲哀ノ心ナシ禮
儀ヲ廢從宦ヲシテ女子ヲ畧シ衣車ノ内ニ載セ
テ入シメ私ニ鷄豚ヲ買テ食フ淫戲度ナシ博陸
矣其罪ヲ數ヘテコレヲ廢シ武帝ノ孫病已ヲ迎
ヘ立テ天子トス宣帝コレナリ書漢

得地法

武田信玄ハ夕、挫敵決戰ニ長セルノ、ミニアラ

スマタ鎮國安民ニ智アリ他國ヲ伐取テ其地ヲ
將士ノ知行ニ與ルコトナシ御信ニ於テ民モア
リツキ地モ肥タル處ヲ新地加増ニ與ヘテ新ニ
得タル郡邑ハ青地助兵衛小堀伊勢ヲ郡代トシ
賦稅ヲ寬クシ撫安ヲ專ニセラルサレハ信玄一
代ノ間手ニ入タル國民ノ叛ヒ叛タルコトナシ
トツ
荀子十三論得地法云發夫索窮之粟以食之委之
財貨以富之立良有司接之已暮年然後民可信也

野中兼山

石曼卿

土佐ノ海濱蛤蜊ヲ産セス室老野中傳右衛門東
ヨリ歸ルトキ蛤ヲ海船一艘ニ載テ資シコレヲ
海ニ沈ムコレヨリシテ土州ニ蛤ヲ生セリトソ
宋ノ石曼卿海州へ謫セラル、日人ヲシテ挑核
數斛ヲ拾シメ人迹到ラサル處ハ彈弓ヲ以テコ
レヲ種ユ數年ナラスシテ桃花山谷ニ遍シ孫公
長玄珠 賈耽
水戸ノ長久保玄珠輿地ノ學ヲ好ム雲遊ノ道人
廻國ノ行者ヲ延テコレヲ舎シ其經歷スル處ノ
山川土地ノ險易形勢路程ノ遠近ヲ咨詢シ始テ

和漢國語考 卷之十一 唐

皇國輿地ノ全圖ヲ製セリ
唐ノ賈耽地理ノ學ヲ好ム四方及蕃虜ノ使來ル
モノニハコレニ坐ヲ與ヘ其土地山川ノ終始ス
ルトコロヲ問フ凡三十年聞トコロ既ニ備ル因
テ海内華夷ノ畜ヲ換ス其郡人ニ問フニ皆實事
ヲ得テ虛詞ナシ盧氏雜說

高陽親王

竇乂

高陽院ノ親王ハキハメタル物ノ上手ニテ細工
ニ工ニオハシケリ京極寺ヲ建タヘリシニ其
寺ノ前ノ河原ニアル田ハ此寺ノ領ナリ而ニ天

下旱魃シケル年此親王長四尺ハカリナル童ノ
器ヲ左右ノ手ニ擎テ立ル形ヲ造リ此田ノ中ニ
夕テ、置キ人來テ其童ノ持タル器ニ水ヲ入レ
ハ盛受ルト則人形ノ頭引カ、ルヤウニ操リ造
夕レハ是ヲ見ル人コトニ水ヲ持來テ器ニ盛リ
興シケルマ、京中ノ人群テ市ヲナシケレハ其
田旱ノ患ナクシテ滿秩シケリ
唐ノ竇乂治生ノ術ニ長ス京城ノ南ニ十餘畝坳
下潜汗ノ地アリ目テ小海池トイフ旗亭ノ内衆
穢ノ集ルトコロナリ又求テコレヲ買フ其中ニ

口實并事卷上 無公園藏

和漢詩集卷之十一
三十四
抽村園藏

於テ標ヲ立幡ヲ懸池ヲ遶テ六七鋪ヲ設ケ煎餅
ヲ造リ小兒ヲ集メ瓦礫ヲ擲テ其幡ヲ擊シメ中
者ニハ煎餅糰子ヲ與フ月ヲ踰スシテ兩街ノ小
兒競往キ瓦ヲ擲テ池ニ滿ツ遂ニ經度シテ店ニ
十間ヲ造ル號シテ賣家店トス太平廣記

文雅五學殖詞藻
情性之類

紀貫之女處士某

村上天皇天曆年中ニ清凉殿ノ前ノ梅枯萎ケレ
ハ勅シテ尋求シムルニ是ニ代ヘキ梅樹ナシ或

奏シテ云西ノ京某ノ家ニ梅アリ花ヒラクトキ
ハ其色淡ク其香濃ナリコレ其選ニ當レルモノ
ナラニカト於此人ヲシテ梅ヲ堀シムルニ主ノ
女枝間ニ帑ニ歌ヲ書付テ奉レリ

勅ニハイトモカレコレ鶯ノ宿ハト、ツイカ、コタヘム
主上アハレマセ給ヒ其主イカナルモノツト其
邊ノ人ニ問セ給ヘハコノ主ノ女ハ紀貫之ノ女
ナリトコレヨリ此梅ヲ鶯宿梅トイフ
處士某山中ニ隱居ス庭ニ松一株アリ三百年ノ
物ナリ縣令公署ヲ起スエニ命シテコレヲ伐シ

和漢詩集卷之十一
三十五
無公園藏

香海馬車卷一
三五
掛村園

ム處士研白レテ絶句ヲ上ニ書ス

大夫去作棟梁材無復清陰護綠苔今夜月明風

露冷誤他雲外鶴歸來

縣令コレヲ讀テ悵然トシテ伐コトヲ停ム東谷贅言

管丞相 韓魏公

昌黎ノ初管公道重陽ノ宴ニ侍シテ菊ヲ賦ス其

一聯ニイハク

謙德晚開秋月抄 勁心寒立曉霜前

時ノ人其守持ノ貞固ナルヲ嘆服セリ

宋ノ韓魏公琦ノ雪ヲ賦スル詩

老石蓋溪鹽虎陷 冷枝擎重玉龍寒

此句ヲ讀テモ亦公ノ自任スルトコロ如此ヲミ

ツヘシ事文類聚前集

釋證真 范仲淹

山門ノ寶池坊證真ハ神銳強達ノ人ナリ寶處院

ニ入テ世縁ヲ謝シ戸ヲ閉テ大藏ヲ翻閱スルコ

ト十六遍ソノ間串擲ヲ以テ食トシテ不出源平

三年ノ擾亂ヲシラサリシトノ

范文正公仲淹劉某トモニ長白山ノ僧舎ニ止テ

修學ス粟米二升ヲ煮テ粥一器ヲ作ル宿ヲ經レ

和漢詩集卷上
無公園藏

ハ疑ルヲ畫シテ四塊トシ早晚ニ塊ヲ取り蓋數
十莖ヲ斷シ汁半盃ニ少鹽ヲ入レ爰テコレヲ啗
フ如此スルコト三年ナリ自警

源頼政 蘇麟

頼政禁裡ノ宿衛タリシニ久シク加階セサリシ
頃

人シラス大内山ノ山守ハ木隱テノミ月ヲミルカナ
カクヨミテ昇殿ヲ許サレ又其後一タ
ノホルヘキ優ナケレハ木本ニシ井ヲ拾テ世ヲワタル哉
コノ歌ノ徳ニテ三位ニナサレケリ

范文正錢塘ヲ鎮セシ時兵官ミナ薦舉ヲ得ヒト
リ巡撫蘇麟錄セラレス乃詩ヲ獻シテ云

近水樓臺先得月 向陽花木易成春

公即日コレヲ朝廷ニ薦ラレシトソ清夜錄

源清 劉攽

嵯峨ノ隱君子源清ヒト、ナリテ冠婚セヌ閑居
シテ學ニ耽ル左大辨橋ノ廣相ハ博士ノ魁ナリ
通セサルトコロアレハ必西山ニ往テコレヲ質

問フニ明了ナラサルハナシ
劉原父攽詞掖ニ在テ馬ヲ立テ九制ヲ揮ノ才ア

リ歐陽文忠嘗テ折簡シテ問フ入閣何レノ年ニ
 起ル閣ハコレ何ノ殿ソ延英ヲ開クハ何レノ年
 ニ起ル五日一起居遂ニ正衙ヲ廢シテ坐セサル
 ハ何レノ年ニ起ル三ノ者孤陋未詳乞フ本末ヲ
 示セト原父客ト對食ス明日答ヲナスヘシト云
 ハレシカ復使ヲ呼回シ立テ報ヲ竣レメ坐中ニ
 就テ入閣ノ事ヲ疏スルニ詳盡シテ遺ルコトナ
 シ歐公大ニ驚テ原父博學及ヘカラストイヘリ
 其後原父私親ニ謂ヘラク好箇歐九極テ文章ア
 リ但甚書ヲ讀サルソミ惜ヘシト東坡コノ言ヲ

聞テ軼カ輩コレヲ若何カセニトイヘリ事文類聚別集

武將詩

貞山藤公驍果ニシテ善戰フ冠歲ヨリ行間ニ奔
 走シテ虚日ナシ而シテ馬上少年ノ一絶襟懷豁
 如真ニ文武ノ材トイフヘシ
 馬上少年過時清白髮多殘軀天所許不樂又如
 何
 宋ノ沈慶之目書ヲレラス上嘗テ羣臣ト歡飲ス
 ルトキ逼テ詩ヲ作ラシム慶之顔師古ニ請テ筆
 ヲ採シメ口授シテ云

微生遇多幸得逢時運昌朽老筋力盡徒步還南

岡辭榮此聖世何異張子房

上悦コトフ衆坐稱美セリトソ藝苑

事文類聚別集云曹景宗大破魏軍振旅凱入帝

於華光宴飲因令左僕射沈約賦韻景宗不得韻

意色不平啓求賦詩唯餘競病二字景宗便援筆

而成曰去時兒女悲歸來茄鼓競借問行人何

如霍去病帝欣然不己約及朝賢驚歎竟曰

衰世好尚

憲實シノベハ鎌倉ノ執事ナリ典籍ヲ好ム下野足利ノ

學校ニ五經ヲ寄附シテ今ニ殘レリ一卷コトニ

上杉安房守憲實寄進不可出學校之門ト記ノ花

押ヲ居スヘタリ手迹ヒモ甚適勁ナリトソ

鎌倉大艸紙云下野國足利學校ハモトコレ小

野タカ篁ノ舊跡ナリ承和六年篁國司タリシトキ

ノ建立ナリ上杉安房守憲實足利ハ公方御名

字ノ地ナレハ再興シテ學領ヲ附シ學徒ヲ憐

愍ス大明ヨリ五經ノ正義ソノホカノ諸書ヲ

收ム又大明ノ正使蔣龍溪學校ノ二大字ヲ書

シケリ堂内ニ孔子ノ木像アリ又三幅一對ノ

畫像アリ中ハ孔子左ハ顔子右ハ子路古法眼
コレヲ圖ストカヤ

晋ノ李暠凉州ニ據リ文典ヲ好尚ス書史脱落ス
ルモノアレハ躬ヲ補葺ス從事コレニ代ニコト
ヲ請フ暠云躬ヲコレヲナスユヘンハ人ヲシテ
此典籍ヲ重セシメント欲ルノミト謝陳留評云
値兵戈擾攘之際而好尚如此亦足喜矣文海披沙

源俊賴 趙抃

藤原基俊源俊賴和歌ノ宗匠ニシテ常ニ相競レ
ケリ基俊ハ博學ノ人ナリケレハイツモ俊賴ノ

學オナキコトヲ譏ル俊賴カヘリ聞テ文時朝綱

秀歌ナシ躬恒貫之佳詩ナシトソイハレケル

王安石公卿ト新法ヲ争テ云君輩讀書セサルニ

依ノミト趙閱道拈コレヲ折テ云臯夔稷契讀ト

コ口何ノ書ソト揚升菴評云此言未足以折安石

臯夔豈不學者耶若折之曰相公誤矣共工驩堯孔

光張禹豈不讀書邪則能折其口而理亦協矣丹録

僧琳賢 沙門道研

横川ノ僧琳賢心匠風流ナリ訢ルコトアリテ雅
兼黃門ノ許ヘ參リシニ黃門出逢テ近頃ヨレ

レ大原ノ瀧ノ歌コソイトヲカシク聞ヘシト曰
ヒケレハ訥ルコトハイカニモアリナシ此仰コ
ソ身ニ深テ嬉ク侍レトテ事ヲ白サスレテ歸ケ
リ

蕪瓊清河ノ太守トナル清慎ニシテ私ナシ沙門
道研謁ヲ求ム意債ヲ理ルニアリ瓊見ルコトニ
玄理ヲ談問ス研ロヲ開クニ由ナシ弟子其由ヲ
問フ研云府君ニ見ユルコトニ經ニ我ヲ將テ青
雲ノ間ニ入ル地トノ事ヲ論スルニ由ナシトテ
遂ニ其券ヲ燒ク世説

紀長谷雄

白居易

長谷雄十八歳ニシテ文章ヲ善クセリ而メ援助
ナシ都良香ハ當時ノ高才ナリ長谷雄其門徒ニ
列ストイヘトモイマタ其名ヲ知ラルハニ及ス
一日北堂ニ於テ諸生會飲ス其時幽人釣春水ノ
詩ヲ賦ス良香獨長谷雄ノ詩ヲ擢テ韻ヲ掇ルノ
間甚風骨ヲ得タリト賞スコノ一言ニ由テ漸ク
聲價ヲ得タリ
尚書白居易舉ニ應シテ初テ京ニ至ル詩ヲ以テ
著作顧況ニ謁ス况姓名ヲ覩熟視シテ云米價方

ニ貴シ居亦不易ト乃卷ヲ披クニ首篇云青々原
上艸一歳一枯榮野火燒不盡春風吹又生此ニ於
テ嗟賞シテ云箇語ヲ道得テ居即易シト因テ之
カ爲ニ譽ヲ延キ聲名大ニ振ヘリ幽間
鼓吹

近衛

謝道韞

今出川近衛ハ鷹司權大納言伊平卿ノ女伊賴卿
覺道上人實伊僧正等ノ妹ナリ兄弟皆歌林ニ秀
ツ近衛九歳ノ時父題ヲ賜フ池ノ氷ナリ兄ノ歌
皆成ル近衛コレヲ見ルニ三十薄氷ヲ詠ス近衛
オモヘラク人ト同ク薄氷ヲ詠センコト興アル

ヘカラスト於是池汀ノ厚氷ヲ詠ス父ノ卿コレ
ヲ視テ歡テ秀逸トス且不忘ハ歌仙ノ列ニ入ン
トイヘリ終ニ父ノ言ノ如シ續古今ヨリ以來五
代ノ勅撰ニ歌數アマタ入レリ
晋ノ謝安内集ス而ノ雪驟ニ下ル安云何ノ似タ
ルトコロソ兄ノ子朗ノイフ鹽ヲ空中ニ撒ス差
擬スヘシト道韞ノイフ未柳絮ノ風ニ因テ起ル
ニ如スト安大ニ笑ヒ樂シム晉書

橘直幹

駱賓王

直幹文章博士タリ天曆八年上書シテ民部大輔

ヲ兼ンコトヲ請フ天皇侍臣ヲシテ讀シム依人
而異事雖似偏頗代天而授官誠懸運命トイフニ
至テ天顔不懌既ニシテ簞瓢屢空州滋顏淵之巷
蒸藿浚鎖兩濕原憲之樞ニイタリテ玉音再三誦
シタニヒ此亦一世ノ文士ナリ何ソ如此沈寤セ
シムルヤコレ朕力過ナリトテ即日詔シテ民部
大輔ニ任ス

按直幹ノ申文小野道風ヲ倩テ書セシム稱シ
テ二絶トス帝亦コレヲ重ス後禁中祝融ノ變
アリ帝火ヲ避テ冷泉院ニ幸ス侍臣寶器ヲ移

レテ行宮ニイタル帝他ヲ問スタ、直幹ノ申
文恙ナシヤト曰レトソ

駱賓王徐敬業カ爲ニ檄ヲ作ル則天コレヲ覽ル
蛾眉不敢讓人狐媚輒能惑主ト云ニ至テ微笑シ
テ不言一杯之土未乾六尺之孤何在トイフニ至
テ矍然トシテ云コレ宰相ノ過ナリ人如此ノ才
アリテコレヲシテ流落不遇ナラシムルヤト書唐

祇王 翻風

太政入道ノ寵妓祇王佛御前ノ爲ニ寵ヲ奪レ六
波羅ノ邸ヲ逐ル、時障子ニ書付タル歌

詩大雅云
何州不黃
何日不行

萌出ルモカルモ同シ野邊ノ艸イツレカ秋ニアテハツヘキ
石崇ノ侍人美艶ナル者數千人翺風最文辭ヲ以
テ愛ヲ擅ニス年三十二至テ妙年ノ者爭テコレ
ヲ妬ミ競テ排毀ス崇譖潤ノ言ヲ受テ退ケテ房
老トシテ群少ヲ主シム翺風怨對ヲ懷テ五言ノ

詩ヲ作ル拾遺

春華誰不美卒傷秋落時哽咽追自泣鄙退豈所
期桂芬空自蠹失愛在蛾眉坐見芳時歇憔悴空
自嗤ミツカシカラフ

詩詞同趣

閑田カシ二筆云川北カハキタ自然齋シヤトイフ人ノ話ニ儀同三
司實陰公ノヨミタマヘル秋田ノ題ニ

朝露ニ袖ラマカセテ小山田ニ晚稻ワレチ干ヘキ日影ラツツ
トアルハマコトニ画ノ如シ吾嵯峨ノ庵室ヨリ
望ムニ秋ノアシタ霧ヲ分露ラシノキテ媪モ婦
モ出來リキノフ川シ稻ヲトリサハキアルハ烟
草クユラシナトシテ日ノサレ昇ルヲマチツケ
テ掛干スオモムキ全ク此御詠ノコトシ能實景
ヲ見トメ給ヒシモノト感ストカタラレシ
張表臣珊瑚詩話云東坡稱陶靖節詩云平疇交遠

風良苗亦懷新非古之耦耕植杖者不能識此妙也
僕居中陶稼穡是力夏秋之交稍旱得雨々餘徐步
清風獵々禾黍競秀濯塵埃而泛新乃悟淵明之善
體物也

又

冲石ノ讚岐伏柴ノ加賀待霄ノ小侍從ナト何
毛秀逸ノ歌ニ依テ名ヲ得タリ
明ノ袁景文白燕ノ詩アリ月明湘水初無影雪滿
梁園尚未歸ノ一聯コトニ人口ニアリ故ニ袁白
燕ト稱セラル清ノ祁文友ノ詩一夜東風吹雨過

多シ
滿江新水長魚鰕王漁洋呼テ祁魚鰕トス此類甚

和漢駢事卷上 終

